

報告番号 甲 乙 第 号

西木 政統君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：薬師如来の信仰と造形—天台宗における展開を中心に—

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学大学院文学研究科教授 林 温
同大学院文学研究科委員

副査 慶應義塾大学名誉教授 紺野敏文

副査 文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官 奥 健夫

本論文は、日本の仏教美術史において薬師如来の信仰を背景にした造形活動がいかに展開しどのような特質をもつものであるかを、特に天台宗の造像史を中心に据えて、古代から中世にかけての具体的様相を追究することによって明らかにしようと試みたものである。

薬師如来という尊格は、薬師関連經典の梵本が発見されていることからインドにおいて成立したことはまちがいないが、インドにおいては薬師如来と同定される遺品はほとんど発見されていない。中国における薬師經典の漢訳事業は四世紀ころより始まっており、彫像あるいは絵画に造像されて一定の信仰をうかがうことができるものの、他の尊格に比べて特に多いとはいえない。朝鮮においても修法記録が少ないこともあるとはいえ、薬師信仰の実態はよくわかっていないという状況である。これに対して、日本においては古代から今日に至るまで数多くの造像がなされ、篤く信仰されてきていることは、広くアジアの視点に立って見たとき薬師信仰史において特筆すべきことといえる。また、その理由について問うことは、わが国仏教信仰史の上で重要な視座をあたえるものといえるだろう。西木政統君はこのような問題意識に立ち、従来、通史的に取り上げて論じられることのほとんどなかった平安時代以降の薬師如来の造像史について、特に天台宗における造像の具体相を明らかにし、仏教美術史上の意義を明らかにしようとしたものである。

本論文の構成は以下の三章九節からなる。

序論

第一節 本論の目的と方法

第二節 本論の構成

本論

第一章 奈良時代の薬師信仰と最澄

第一節 最澄の薬師信仰と戒律

第二節 南都における薬師如来の図像

第三節 地方に波及する薬師造像

第二章、天台系薬師の成立と展開

第一節 延暦寺根本中堂の薬師如来像とその模刻

第二節 天台系薬師如来像の諸相

第三節 天台系の七仏薬師とその造像

第三章 中世の天台系薬師信仰

第一節 東国における薬師如来像の変容

第二節 一日造立仏と薬師信仰

第三節 定印薬師の成立と展開

結論 一総括と展望

史料編

付表編

図版編

論文概要

薬師信仰の最初期における注目すべき事例である天武天皇発願による薬師寺建立以来、薬師如来に対する信仰は病気治癒を祈願することが最も一般的である。一方、薬師如来に関わる経典を繙くならば、延命長寿はもとより浄土への往生、外敵の調伏、戒律の護持など幅広い利益が約束されており、薬師如来に対する期待の多様性がうかがわれるが、九世紀に入ると国家鎮護に関わる祈願がなされるに至る。

国分寺をはじめとする諸寺において薬師経典読誦や修法が行われ、薬師如来像の新造、または釈迦と交替して本尊となされる例さえあったが、こうした流れにあって奈良時代末頃から官寺・私寺の本尊が薬師如来とされる例も多くなり、平安時代後期に阿弥陀信仰等が隆盛をみるまで、薬師信仰が朝野を問わず広く行われたといつてよい。平安後期以降においても薬師如来像の現存作例は少なくなく、文献上においても修法例は中世を通じて多く見いだせる。

従来、薬師信仰を取り上げその信仰と造像を包括的に論じようとした研究はなかったわけではないが、仏教史の立場から論じたものは薬師如来像現存作例の実証的な比較検討が十分に咀嚼されているとはいえず、一方美術史的な観点から薬師如来像を論じたものにおいては、美術的に優れた作例の集中する平安時代前期を中心に検討がなされ、平安時代後期から鎌倉時代以降の遺品については、主に様式史的観点から個別的作例を逐うにとどまっている。しかし、古代において薬師信仰が盛んであったことは言を俟たないが、実際には中世においても盛んに行われており、古代的な薬師信仰が中世にかけてどのように展開していったのか、そこにいかなる系譜と変容が見出されるのかという点について考察を加える必要があるのではないか。

以上のような問題意識の上で、西木君は特に天台宗における薬師如来像の造像に注目する。天台宗開祖である最澄が薬師信仰者であったとみられるうえに、比叡山延暦寺の根本中堂には最澄が自ら刻んだという伝承をもつ薬師如来像（以下、根本中堂像と称す）が本尊として安置され朝野の尊崇を集めてきた。この最澄自刻の薬師如来像に対する信仰は、その模刻をとおして全国に広がり、各地の拠点となる天台寺院に祀られることで、天台勢力の教線拡大にも益するものであった。その信仰は平安時代を盛期とするが、西木君によ

れば中世以降も靈驗仏信仰等と結びつきながら独自の展開を遂げており、日本の薬師信仰を考えるにあたり、天台宗における造像は重要な視点となるものである。

以上の観点から、本論では、現存遺品に対する図像学的な視点を中心に、史料解釈を踏まえながら天台系の薬師信仰の成立と展開、さらに古代から中世にかけての変容の過程を明らかにしていく。以下、簡単に章ごとに概要を述べる。

第一章では、天台宗の薬師信仰を考えるにあたり、その前史ともいべき南都すなわち奈良時代仏教における動向と最澄の薬師信仰について考察をおこなう。奈良時代の薬師信仰の捉え方には薬師悔過の問題や本地仏としての性格等多くの視点がある。その中で、西木君は薬師經典にも説かれる戒律との関わりに着目する。

戒律を護る浄僧によってこそ鎮護国家が果たされるとの思想背景から、唐僧・鑑真の来日は極めて重要な意義があったが、唐招提寺金堂に盧舎那仏・千手観音とともに薬師如来像が安置されたことは、東大寺・観世音寺・下野薬師寺の三戒壇を象徴しているとされる。一方で、旧講堂の木彫薬師如来立像は最澄自刻の延暦寺根本中堂像を含む平安時代初期の薬師像に無視しえない影響を及ぼしている。また、大乘戒壇建立をめぐる最澄と鋭く対立した法相宗僧徳一が東北地方で精力的に布教したことに関しても、山林修行が持戒と深く関わっていることが指摘されている。最澄もまた法相宗興福寺から出て比叡山に草庵を営んだが、こうしたことから最澄が薬師如来に対して戒律の護持を期待していたことを指摘する。

最澄の薬師信仰が最澄独自のものというより南都仏教を背景としていることは、根本中堂像の手勢が唐招提寺旧講堂像をはじめ、その影響を受けた造像とされる京都神護寺像や滋賀鶏足寺像と同様のいわゆる智吉祥印であったことから推測されるが、延暦寺根本中堂の最澄自刻像の前で受戒を行ったことが文献史料から確認でき、戒律護持をとおした鎮護国家こそが最澄の造像意図であったと、西木君は指摘する。

最澄自刻像（根本中堂像）は現存せず、その印相についても諸説あって不明瞭であった。第二節においては大阪・獅子窟寺薬師如来坐像を取り上げ、優美で独特の印相をとる本像について様式検討によって製作時期を九世紀半ばより後半期と位置づけたうえ、本像が南都伝来と伝わること、最澄が渡唐に際して発願造像した善名称吉祥王如来（薬師如来の異名）の名で呼ばれていたこと、独特の印相が「智吉祥印」とされる最澄自刻像と通底することなどを丹念に論証している。さらに第三節では、天台宗は奈良時代から平安時代にかけて各地に普及した薬師如来を祀る寺院を天台化することで、薬師信仰を核としながら勢力を拡大したことの一例として、岩手・黒石寺薬師如来坐像を取り上げる。本像は貞観四年（八六二）の墨書銘が像内に記されており、この種の像内銘を持つ古例として著名なものであるが、当時における対蝦夷政策の最前線であった胆沢城に程近いこと等から、東方鎮護ひいては蝦夷調伏との関わりが論じられてきた。西木君はあらためて墨書銘を判読して一案を示した上、そこに対蝦夷という公的な意図を読み取ることは難しく、在地の有力者が共同で造像し追善や増益といった私的な願意を込めたものと推測する。そして、本像に見られる古様な図像的特色をも鑑みて、造像銘記を奈良の先例にならせたものとする。

第二章では、今日では原像が失われている延暦寺根本中堂像について、文献史料によってその図像を明らかにしていくが、第一節では根本中堂像の初期の忠実な模刻と思われる作例として室生寺金堂薬師如来立像を取り上げ、従来注意されることの少なかった本像に

ついて「天台系薬師」の古例としての重要性を指摘する。

根本中堂像のおもな特徴としては、五尺五寸程度の大きさ、朱衣金体という表面仕上げが挙げられるが、根本中堂像が秘仏であったことにもより、教学上とりわけ重要な印相については異説が多く、中世から議論の対象となっていた。近年、建保年間（一二一三～一二一九）に著された天台座主慈円の口決『四帖秘決』の紹介により、左手を屈臂して前方へ伸ばす手勢であることが明らかになったが、この印相の解釈について、施無畏与願印説・智吉祥印説・初門釈迦印説等の見解が見出される。実際の造像においても凶像の曖昧さが生じており、例えば清涼寺釈迦如来像におけるような意味での模像は天台において見出せないともいえる。しかし、実際には平安時代以降天台宗においては根本中堂像の「模像」を標榜して盛んに造像が行われたのであり、そのことの意義と実情について第二説で詳細に論じられる。模刻には細部に至るまで原像を忠実になぞる複製に近いものがある一方、靈験仏として多くの模刻像を介して信仰が流布されていった長谷寺十一面観音像や善光寺阿弥陀三尊像のように、原像の一部の典型的特徴を写すことで原像を想起させるものがあり、頭髮や印相・着衣を模しながらも、立像から坐像に変更するような例さえ模像とされる。すなわち「模刻」の目的が、忠実に造形を写すことではなく、原像の持つ靈験・由緒といった目に見えない価値を写すことにあったことを、多くの例証によって論じている。

他ならぬ延暦寺においても最澄自刻像以外複数の薬師如来像が安置されていたが、それらは自刻像の「模像」とみなされるにもかかわらず、慈円によって報告された根本中堂像の形姿とはややことなり、むしろ釈迦如来と同様の施無畏与願印であった。もと彩色を施さない檀像であった最澄自刻像は弟子義真によって朱衣金体像に改められたが、根本中堂像を優填王思慕像と同体と見なす背景を持つと指摘されていること、延暦寺において天台教学で最重要視される『法華経』に説かれるため、根本中堂像と釈迦如来を同一視する説が行われたこと等も、釈迦の印相である施無畏与願印像の採用に拍車をかけたものと、西木君は推測する。

典型的な根本中堂像の模刻例として康平六年（一〇六三）に造立された比叡山実相院の薬師如来像があるが、「中堂本仏を写し奉る」としながら半丈六の坐像であり、金色仕上げで施無畏与願印をとっていた。しかも、のちに宝珠ないし薬壺を持つように改変されている。

以上のような根本中堂像の模刻例のバリエーションに注目し、西木君は平安時代における様々な天台系薬師如来像について検討した結果、造形的規範としての厳密性を欠いたゆえにかえって様々な造形がありえたことを、薬師信仰が盛んにおこなわれた側面として指摘する。

さらに第三節では、天台密教の四大法として重視された七仏薬師法に因む七仏薬師像について、数少ない遺品である滋賀鶏足寺像を中心に検討を加える。延暦寺根本中堂には七仏薬師像が安置されていたが現存せず、その像容を偲ばせる遺品として重要であるが、これまで本格的に論究されてこなかったものである。西木君はまず七体のうち中尊にあたる像と他の六体とを区別して平安時代末十二世紀の作とし、一体を除く五体は鎌倉時代、一体のみを室町時代作とする。そして中尊は檀像風素地仕上げで珍しく、左手に薬壺を持つものの施無畏与願印と見なしうるが、記録から知られる延暦寺根本中堂七仏薬師像が檀像仕上げであったことから、これを規範として鶏足寺が天台勢力下に入った鎌倉時代に六体

が加えられた可能性を指摘する。

平安時代には各地に比叡山や延暦寺、根本中堂といった地勢や堂塔を再現する試みもおこなわれたが、根本中堂像の図像が教学的な厳密さからある程度自由であったからこそ、既存の薬師如来像をも取り込むことが容易となり、こうして薬師如来や七仏薬師を中心としながら天台宗の教線拡大を推進したと説く。

最後に第三章では、平安時代を通じて各地に展開した天台系の薬師信仰が、鎌倉時代から盛んとなる靈驗仏信仰の高まりを受けて変容していく過程に注目する。奈良時代に薬師如来像が造像安置された寺院のうち、天台宗の教線拡大にともない、同宗の拠点寺院となっている例は少なくないが、中世以降に薬師信仰はどのような具体相を現すのか。この問題を考えるにあたり、興味深い例がとりわけ関東を中心とした東国において認められる。その具体例として以下、三節にわたって考察を加えている。

まず第一節において、上記のようなプロセスは京都清涼寺に伝わる釈迦如来立像に特有の波状髪と、根本中堂像の手勢とされた智吉祥印をあわせて採用する薬師如来像が関東において盛んにおこなわれたことに典型的であるとし、実例として東京東善寺薬師如来像・神奈川東光寺像・福島薬師寺像を挙げて考察を加えている。清涼寺釈迦如来像の特徴であるいわゆる波状髪を表した如来像は、鎌倉時代以降全国で六四件報告されているが、そのうち五五件は愛知県以北に所在し、薬師如来像は三六件を数える。しかもその伝来地の多くが東国、特に関東に見られることは注目される。

東善寺像の印相は中世以降に行われた根本中堂像の印相としての智吉祥印と見ることができるが、こうした薬師如来像に清涼寺釈迦像の特徴である波状髪を用いた背景に、天台教学においては釈迦と薬師が同一視されていたこともあり、清涼寺像の靈驗性を天台宗における由緒正しい根本中堂像に結びつける意図を読み取っている。

次に、一日造立仏という造像作法による特殊な薬師如来像にも、左手を屈臂する根本中堂像の手勢が採用されており、最澄自刻とされる根本中堂像がさまざまな形で中世以降も信仰の対象でありつづけたことを第二節において明らかにする。特に『吾妻鏡』の薬師如来関連記事を検討し、そこで天台僧の関与に着目する。とりわけ文応元年（一二六〇）及び弘長三年（一二六三）における北条時宗及び時頼による等身薬師如来像の造立供養記事では、ともに病氣平癒を祈願として「一日の中に」造立したことが特に記されているが、ともに供養導師は尊家という天台僧であった。尊家は記録によって薬師法の修法に長けていたことが推測される。両像は現存しないために像容は不明であるが、同じく一日造立仏であることが確かな奈良西方寺薬師如来立像は等身であり、かつ波状髪に表されている。こうした例から、文永九年（一二七二）以前に製作されたことが墨書銘から知られる千葉東光院薬師如来像に注目し、同像が根本中堂像と同印を結ぶこと、鉦彫像という短時日で製作される仕上げであることから、一日造立仏である可能性を指摘している。

第三節では、神奈川覚園寺薬師如来坐像を取り上げる。定印を結ぶという、宋代図像の受容による薬師如来としては特異な姿についても、釈迦薬師同体説を背景としながら近世以降その流行をみることは、古代寺院の天台化のプロセスを想起させ、天台勢力の伸張において薬師信仰の占める意味が小さくなかったことを指摘する。

以上、古代から中世にかけての薬師信仰の系譜と変容を、天台宗における薬師如来造像の展開を中心としてたどり、日本における薬師信仰の特質の一端を明らかにした。通時的

な視野で現存遺品に分析を加え、史料解釈を併せおこなうことによって、天台宗関係の造像が平安時代以降の薬師信仰の伝播と普及に大きな役割を果たしたと結論づけている。

審査結果

先述したように、日本の仏像彫刻史において薬師如来は大きな位置を占める。阿弥陀如来像のように平安時代中期より盛行した浄土教信仰を背景とする造像とは異なり、薬師如来の造像背景については単に病氣平癒祈願というに留まらない、複雑で多様な信仰あるいは意図が推測され、様々に論じられてきた。とはいえ、その論究は特定の時代や寺院、像例に関わるものが多く、とりわけ奈良時代から平安時代前期に集中してきた憾みがある。それは美術的に優秀な遺品がその時期に輩出していることから自然なことではあったが、薬師如来像の造像は平安時代中期以降にも盛んに行われており、個別的な論考だけでなく、大きく歴史を通観した考察がなされてしかるべきであった。しかしながら、薬師如来像に関しては奈良時代以来、日本の仏像彫刻を代表するような優品も少なくなく、それら各像に関する研究史において相当数の蓄積があり、したがってこれを中世まで視野を広げればその研究成果は夥しい分量になる。

西木政統君は修士論文で獅子窟寺薬師如来坐像を取り上げて以来薬師如来像に関心を持ち続けてきたが、上のような研究蓄積を先ず読みこなしの上で新たな論点を見出すことは容易なことではなかったに相違ない。また、如上の薬師信仰史を網羅して記述すれば膨大な著述となるであろうが、それは博士課程在学中で到底達成しうる目標ではない。このような薬師如来の信仰及び造像研究をふまえて、未だ論究が十分とはいえず包括的な視点が欠けている平安時代中期から、とりわけ未開拓な部分が多い鎌倉時代以降の造像までを視野に入れて、通史的にその展開の様相を解明しようとする問題設定は、今後解明・発掘の進展が多く見込まれる領域であるといえ、若い研究者の取り組みとしてふさわしいものと思われる。

本論文は日本における薬師如来の信仰と造形を主題としているが、その前半ともいえるべき奈良時代から平安時代初期の薬師信仰と仏像遺品についてはあえて詳しくは立ち入らず、平安時代に大きく教線を伸ばす天台宗の薬師信仰に狙いを定めて、薬師造像を歴史的に追究する。その出発点として、最澄の薬師信仰に関わる戒律と薬師如来との結びつきに注目する。すなわち、最澄が自ら刻んだ薬師如来像を延暦寺根本中堂の本尊とした意図として、戒律護持による国家鎮護の達成という目標があったとする。最澄は東大寺に設立された戒壇とは別個に、延暦寺に大乘戒壇を設立するために奮進したが、その意味でも天台宗内における持戒については強い関心を抱いたはずであり、すくなくとも大乘戒壇設立許可が下りるまでは、根本中堂像はいわば授戒師として天台宗にとって重大な意味を持ったとみなされる。そのような最澄自刻像に天台教団の指導者としての最澄像が重ね合わせられて、特別の性格をまとわせられるようになったとすることは十分に納得できることであり、平安時代における根本中堂像に対するこだわり、多様な言説や模刻像の存在によっても証されるだろう。

そのような根本中堂像は度々焼災を受けて秘仏化されたことから、その図像特に手勢(印相)について異説を生むこととなり、規範像としての厳密性を欠くに至った。この点は、清涼寺釈迦如来像や善光寺阿弥陀三尊、あるいは長谷寺十一面観音像が一目でそれとわか

る図像的特色をもって強い規範性を示していることと対照的であるが、却ってそのゆえにこそ「根本中堂像」は他の既存の薬師仏像を包摂する柔軟性を獲得して天台宗の教線拡大に益し、多様な「模刻」像を生み得たのだと西木君は評価する。その論旨は概ね妥当とすることができよう。

鎌倉時代における薬師造像を扱った第三章は本論文でも最も読み応えがあるところで、特に関東を中心として遺存する波状髪を持った薬師如来像や一日造立仏、さらに定印を結ぶ薬師如来像といった切り口により、鎌倉時代における薬師造像の背景を検討して、そこに平安時代以来の天台系薬師造像の伝統と新たな造形的工夫を見出している。西木君独自の着眼点と綿密な考証が光っている部分である。

以上のように、本論文は平安時代から鎌倉さらに室町時代に至る薬師如来の造形を、造像背景となる信仰をあわせ検証しつつ通史的にまとめ論じたものであり、新たな創意発見を披瀝するというのではなく、地道な検討作業の蓄積と目配りによって、複雑に乱立する薬師群像の中に一つの道筋と整合性を見出していくという労作である。このような成果は、今後の薬師関連の諸研究に裨益するところ多大なるものと評価される。

但し、薬師信仰という非常に大きな論題に対して本論文が説き及び得たのはその一面といわざるをえず、特に副題に示すように天台系薬師に限定された憾みがある。もちろん、薬師信仰全体を遍くかつ深く論じるというのは、課程博士という期日では到底達成し得ない過大な要求というべきであろう。むしろ、「天台系薬師」という一視点を設けたからこそ一貫した展開史を編むことができたというべきであろう。しかし、それならばこそ、天台宗における薬師信仰の特質を、奈良時代のそれと対比するかたちでより明確に論じて欲しかったところである。最澄における持戒意識、あるいは最澄自刻という権威・拠り所としての性格、さらには『法華経』教主としての釈迦との同体説といった諸指摘がなされてはいるが、一層深めた論究が欲しかったところである。また、本論文が美術史学の立場から造形史に主眼をおくとはいえ、平安時代から鎌倉時代に至る薬師信仰の内容についての概観が提示されてしかるべきであったろう。論を進めるに急でありすぎて、関連する背景その他諸項目が省略されたために、全体的な論理の明快さが損なわれ説得力を弱めていると思われる箇所が見受けられる。また、各論において必要であったとはいえ、記述内容が重複するところがあり、論文全体の構成のしかたにももう一工夫欲しいところである。

以上のような未熟な点はあるものの、本論文の持つ学術的な成果を損なうほどのものではない。本論文で論究した諸問題、あるいは結論として推定した見通しや解釈が、同研究の一つの基盤となり種々の示唆を与えるものとして学界に有益であることはもちろんであるが、困難な大テーマに立ち向かい真摯かつ意欲的に取り組んだ本論文は西木君自身にとっても今後の研究の出発点となるものである。審査員一同は、本論文が博士号を受けるに十分な資格と意義を持つものと評価し、判定したことをここに報告する。